寛文12年再建の瑠璃寺本堂の造営文書と大工について

ON BUILDING RECORDS AND CARPENTERS OF THE MAIN HALL OF RURI-JI TEMPLE, NAGANO, RECONSTRUCTED IN 1672

吉澤 政己
Masami YOSHIZAWA

In Ruri-ji temple (Takamori, Nagano prefecture) are kept a number of archives including 28 building records of the main hall reconstructed in 1672. Inquiring into building specifications (so-called "Jiwari-tyumon") and quantity sheets of material (so-called "Kiyose") made conditions of building the main hall at that time clear, such as follows: on planning and construction, master carpenters submitted the specification and the quantity sheet of the main hall to the client (Ruri-ji) at first, and then the client gave an order for building materials. On carved members like "kaerumata" were also ordered by the client.

Keywords: *Shiyougaki, Kiyose, Ukeoi, Carpenter, Edo Period, Ruri-ji temple*
仕様書、木寄、請負、大工、江戸時代、瑠璃寺

1. はじめに

瑠璃寺は、長野県の南部、下伊那郡高森町にある天台宗の古刹で、本堂は寛文12年(1672)に再建された三間堂で、薬師堂ともよばれている¹⁾。この本堂は昭和56年度の「長野県近世社寺建築緊急調査」²⁾で調査され、平面形式(柱の立ち方)として天台真言系三間堂の類型上1つの基本型を示していることが判明している³⁾。

瑠璃寺には多数の古文書が残されており、今回その資料整理がおこなわれ「瑠璃寺古文書目録」がまとめられた⁴⁾。この結果、本堂の造営に関する注文書(建築仕様書)が2点、木寄(木材数量計算書)が5点、勧進帳が2点、奉加帳が15点など合わせて28点の本堂造営史料が確認された。これまで長野県内にある17世紀中期の建築について棟札以外のまとまった造営史料が残されている事例はあまり知られていない⁵⁾。そこで本堂造営に係わる史料についてその内容を検討し、当時の設計・施工の進め方がどのような形態であったのか、造営に係わった大工がどのような大工であったのか、また瑠璃寺本堂が当時の信州のほかの建築と比較してどのような建築的特徴をもっているのかについて考察したい。

2. 瑠璃寺本堂の概要

本堂は、方三間、入母屋造、鉄板葺(元こけら葺)の堂(図1、3)で、四方に縁をめぐらし、一間の向拝をつける。内部は四天柱のうち来迎柱を側柱筋より後退して立て、平面は前一間通りを外陣、後ろ二間を内陣とする。主屋の正面中央に両開きの格子戸(元は両折棧唐戸)を入れ両側面中央は片引の舞良戸とし、ほかは横羽目板壁とする。ただし、外陣部分は、腰貫上に横連子窓をつける。

構造は、側まわりは円柱を立て、縁長押・腰貫・内法長押・飛貫・頭貫・台輪で固め、組物は出組とする。中備は四面の中央を本蓐股とし、ほかは撥束とする。妻飾は虹梁大瓶束とし、笈形をつけ、軒は二軒の繁垂木とする。天井は中央を鏡天井、周囲を化粧屋根裏とする。

向拝は礎盤の上に大面取角柱を立て、根肘木付の虹梁でつなぎ、正面側に唐獅子、側面側に象の木鼻をつける。中備に本蓐股をいれる。組物は皿斗付大斗に出三斗をおき、さらに通肘木を通し、連三斗・実肘木で桁を受ける。手挟は牡丹の籠彫とする。主屋とは根肘木付の海老虹梁で繋ぐ。軒は打越垂木を用いた二軒繁垂木とする。

この本堂は元文4年(1739)に大風のため大破し、修理

されている⁶⁾。本堂の軸部には取り替えられた部材がみえないが、背面の垂木には反りがないので、背面側の屋根根が大破したものと考えられる。

3. 造営史料

本堂の造営に関係する史料は、万治3年(1660)の『信州大嶋山本堂勸進帳』をはじめ28点あるが、ここでは建築に直接関係する7点の史料を検討した。

(1) 棟札

「奉修造薬師堂一字」の棟札には「大工 飯田之住 田辺 太右衛門尉為長」とあり、また、「信州伊那郡大嶋山瑠璃寺本堂辛亥十月三日始翌年仲冬吉日成就畢」とあるので、寛文11年10月に着工され、翌12年11月に竣工し、大工は田辺太右衛門尉為長であったことがわかる。

(2) 寛文3年「御薬師堂木寄」・「御本堂御材木之覚」

寛文3年の木寄は2通あり、1通は2月に飯田善太郎(大工、後述)が提出した「御薬師堂木寄」(図2)、もう1通は3月10日の日付がある「御本堂御材木之覚」である。

飯田善太郎の署名のある木寄の内容は、

御薬師堂木寄				
「	梅	一	拾貳本	長壹丈五尺 壹尺貳寸角 柱
	同	一	四本	長貳間半 壹尺三寸角 入かわノ柱
	同	一	五本	長三間 八寸角 なけし
但シ小数二十丁ニ成ル 四枚わり (以下略)」				

で、もう1通の「御本堂御材木之覚」の内容は引物(土居桁)と軒桔木の松丸太が記されていない以外はまったく同様である。末尾に「右之代金貳拾両ニ相定榑御請申候(中略)、当年中ニ急度相渡し可申候(中略)、大嶋山法印様、御内行善坊様」とあり、請主は高遠の桜木重兵衛、請人は市田(現高森町)の上沼長四郎(大工、後述)、新井(現松川町)の城田善兵衛ほかの連名があり、請負証文の形式をとっている。つまり、飯田善太郎の木寄にしたがって寺が発注し、桜木重兵衛が材木納入を請け負ったことを示している。

(3) 寛文6年「注文之うつし」

ところが、この契約が成立した3カ月後に本堂再建を発願した48世信応は遷化する。49世亮応は再建事業を継続し材木納入の管理から始めたが、当初から材木納入が滞っており、寛文4年10月には奉行所(飯田藩)に「乍恐言上仕候事」として本堂建築材木納入が滞っていることを訴えている(寺文書)。

寛文6年2月の「注文之うつし」は、同3年に契約した「御本堂御材木之覚」を納品検査のために書き写したもので、文末に「大小木数三百本、内百四拾貳本大小ニ而三度ニうけ取分、残而百五拾八本いまた請取さる分」とあり、この時点でもなかなか注文どおりの材木が納品されていないことがわかる。

図1 瑠璃寺本堂 外観

図2 「御薬師堂木寄」(部分)

また、納品された材料も、

「	梅	一	拾貳本	長壹丈五尺	壹尺貳寸角	日二 ⁷⁾ (12本)
			内九本	ハ壹丈四尺をうけ取、	壹尺つゝノ不足	
	同	一	四本	長貳間半	壹尺三寸角	ヨ(4本)
			内貳本	ハ壹尺つゝノ不足		
」						

というように寸法通りとはいかなかった。「四本 長貳間半 壹尺三寸角」の柱は本堂の内部の柱を指しており、現本堂の該当する柱を実測すると、来迎柱と手前2本の柱では太さが異なっていた(図3)。文書には「内貳本ハ壹尺つゝの不足」とあるから、木寄の寸法どおりに納品された材を来迎柱にあて、太さが1寸不足して納品された材を内陣・外陣境側の柱にあてたと確認できる。

このような状態であったので、同年4月には瑠璃寺から奉行所に再び「乍恐御訴訟申上仕候事」として本堂建築木材の納入滞りを訴えている(寺文書)。

(4) 「大間三間四面ノ堂ノ木寄ノ注文」

次に、寛文8年と裏書き⁸⁾のある「大間三間四面ノ堂ノ木寄ノ注文」をみると、木寄の内容は「御薬師堂木寄」や「注文之うつし」と拾い方に違いがみられる(表1)。

柱についてみると、「御薬師堂木寄」と「注文之うつし」では側柱(1尺2寸角)が12本、入側ノ柱(1尺3寸角)が4本、向拝柱(1尺角)が2本の合計18本の柱を数え、「大間三間四面ノ堂ノ木寄ノ注文」ではすべて1尺1寸角

表1 寛文3年と同8年の木寄比較

寸法単位: 寸

寛文3年「御薬師堂木寄」						寛文8年「大間三間四面堂木寄注文」					
部材名	数	長	幅・厚	割り	材種	部材名	数	長	幅・厚	割り	材種
柱	12	150	12	角	桐	柱	18	150	11	角	桐
入側ノ柱	4	150	13	角	桐	柱	2	180	9	角	2ッ桐・樺
向拝柱	2	140	10	角	桐	柱	3	150	9	角	2ッ桐・樺
柱貫	3	180	9	角	2ッ桐	柱	6	120	11	角	2ッ桐・樺
入側ノ柱貫	2	120	9	角	2ッ桐	柱	2	120	6/丁	5枚	桐・樺
内法貫・地貫・板ば貫	8	80	13	6	4丁桐	柱	(6/丁は6寸×1尺の半を以て示す)				
同断	5	100	13	6	桐	同	2	180	6/丁	5枚	桐・樺
長押	5	180	8	角	4枚桐	同	3	180	8	角	2ッ桐
長押	4	120	8	角	2ッ桐	同	7	120	8	角	2ッ桐
丸桁	3	180	10	角	2ッ桐	同	2	180	9	角	2ッ桐
入側ノ丸桁	2	120	10	角	2ッ桐	同	3	120	9	角	2ッ桐
地垂木	16	120	10	角	12本桐	大軒ノ垂木	34	100	5/丁	10本	桐・樺
飛檐垂木	7	120	10	角	24本桐	小軒ノ垂木	34	板子		10本	桐・樺
茅負・木負	5	120	9	角	4ッ桐	茅負・木負	14	120	5/丁	2ッ	桐
茅負反り元	2	150	10	角	4ッ桐						
裏甲・登り	6	120	7	角	3枚桐	裏甲	10	120	5/丁	2ッ	桐
隅木	2	210	9	角	2枚桐	角木	4	180	6/丁		桐・樺
巻斗	7	60	14	4	16宛杉・桧	組物	30	板子			桐
大斗	3	60	12	7	同						
粋肘木	10	60	12	4.5	4ッ同						
実肘木	7	80	13	4.5	6ッ同						
通り肘木	1	120	8	角	4ッ桐						
両破風	1	120	8	角	4枚桐						
縫破風	1	120	6	角	2枚桐						
海老虹梁	8	80	15	6	榎・桐						
隅虹梁	4	110	15	6	同						
向拝虹梁	1	120	6	角	桐						
敷板	16	60	12	4	5枚桐						
惣縁板	17	70	12	4	4枚切杉・桧						
敷居・鴨居	8	75	12	6.5	2ッ桐						
縁葛	4	120	7	角	2ッ桐						
同断	2	100	7	角	2ッ桐						
縁束柱	7	120	8	角	3ッ切桐						
根太	26	75	3	角	桐・樺						
同断	13	95	3	角	同						
惣ノ羽目板	15	70	12	4	4枚榎・桐						
羽目板	3	90	12	4	4枚同						
地軒裏板	7	120	10	角	28枚桐						
飛檐裏板	5	70	12	4	7枚桐						
内ノ天井板	2	100	12	4	4枚桐						
小屋束	15	120	5	角	桐						
小屋桁	14	120	5	角	桐						
小屋垂木	5	120	10	角	28本桐						
鬼板	2	60	13	7	桐						
箱棟へり	1	120	10	角	桐						
箱棟葺板	5	60	12	4	杉・桧						
*引物	6	90	和8-10		松						
(土居桁)											
梁挟み	9	90	6	角	桐・樺						
(繋梁)											
前包み	2	120	7	角	桐						
上とい	8	120	6	角	桐・樺						
*軒桔木	16	150	和4		松						
格子戸	7	70	12	6.5	桐・杉						
唐戸へり	9	75	13	5	桐						
幣軸	3	100	7	角	桐・樺						
同断	6	80	7	角	同						
窓框	6	60	13	4	榎・桐						
隅格子											
簾彫・間斗	5	60	12	4	桐						
束・持送											
簾股	6	60	13	5	桐						
彫物板											
木階	3	120	10	角	桐						
合計	384	(文書では374と誤記)				457					
桔木	20	150	和3	半丸太	雑木						
唐戸・格子	7	80	12	4	桧						

注) *印は寛文3年3月「御本堂御材木之覚」・寛文6年2月「注文之うし」に記載のない部材。

△印は文書に板子と記されている部材。

図3 瑠璃寺本堂 平面図

図4 瑠璃寺本堂 向拝部分

図5 立石寺本堂 向拝部分

図6 瑠璃寺本堂 来迎柱上部の架構

図6 補
大瓶束結綿の
類型

表2 注文書と現在の本堂との比較

	A : 大嶋山築師堂作事之注文	B : 本堂作始之注文	現本堂
平面規模	大間9尺脇間7尺三間四面	同左	同左
主屋柱	丸柱	同左	同左
組物	三斗	同左組・拳鼻付、支輪	同左、支輪なし
中備		大間蓐股(籠彫、外注)	同左
		脇間斗束	同左
頭貫	木鼻は鰐鼻	木鼻付、台輪	同左
軸部	上下に長押	同左	同左
窓	幣軸付格子窓	同左	横連子(幣軸なし)
建具	正面中央に両折棧唐戸	同左	同左(現在取外し)
	側面中央間に舞良戸各1本	同左	同左
板壁	横羽目板、違い接ぎ	同左	同左(合決り)
縁	四方切目縁	同左	同左
軒	二軒垂木半繁もの	同左	同左(繁垂木)
裏甲	布裏甲	同左	同左
屋根	両妻入母屋そなえ	同左	同左(入母屋造)
妻飾	虹梁・大瓶束	虹梁・大瓶束	同左、笈形付
懸魚	あおい鰭	三ッ花懸魚、鰭籠彫	高懸魚、鰭籠彫
棟	箱棟、鬼板、鰭付	同左	同左
内部天井	周囲は化粧屋根裏	同左	同左
	中央は鏡天井	同左	同左
内部架構	外側柱から内部柱に虹梁・	同左	同左
	海老虹梁を架ける		
内陣・外陣境	中敷居・格子戸	同左	同左(現在取外し)
	欄間も格子	大間彫物、脇花狭間	全て菱格子・格子
来迎柱	頭貫、台輪、組物は三斗4具	同左	同左(組物は隅具2具)
須弥壇	腰に彫刻、高欄は逆蓮華	同左	同左
内陣両脇	箱仏壇、高欄は平高欄	同左	同左
床	内陣・外陣とも拭板敷、釘打	同左	同左
向拝柱	礎盤付	几帳面取、礎盤付	大面取、礎盤付
木鼻	鰐	象鼻、獅子鼻(足付)	同左(足なし)
組物	三斗		同左
中備	蓐股	蓐股(籠彫、外注)	同左
手挟	絵縁	籠彫(外注)	同左
軒	二軒	二軒繁もの	同左(打越垂木)

表3 「大嶋山薬師堂作事之注文」の内容

「大嶋山薬師堂作事之注文
 つか／ 一 大間九尺脇ノ間七尺三間四面高サ定リ次第
 ひめこ大斗ハつか
 つか／ 一 丸柱ふとさ定リ次第
 一 組物三ツど桧貫ノはなしかみはな
 つか／ 一 たる木半しげ物二軒めのうらかわ内四方壱間ハ、やねう
 ち中九尺四方ハ、ミ天井
 柱こうりやうたる木木おいかやおううらかわ桁そうはんつが外ハひめ
 こひの木
 一 こはい有こうりやう木はなしかみかいるまたほり物三ツ
 ど軒たる木二のきたはさミゑやう物やねうらそうばんすへ
 て
 長押つかへいちくこうしひめこ
 一 上下ノ長押有リしやうめん乃脇ノ間二間又妻ノ間二間ハ
 いちくをたゝミこうし有リ
 こうしのへりつか・ひの木
 一 内ちん外ちんのさかい中敷居こうし戸皆ニ有リ其上もこ
 うし
 くミ物としゅミのへり斗りひの木外ハつか
 一 内ちんにらいこう柱式本桧貫平桁三ツどのくミ物四そな
 へしゅミだん定リニコしにほり物有リこうらんさかれんげ
 にして
 つか／ 一 内ちん両脇二間箱仏壇平こうらんつけて
 つか／ 一 外かわより中四本ノ柱へこうりやう有リ角こうりやうも
 有リ其上ニゑひ有リ
 つか／ 一 四方ニきりめゑん板ノあつさ定リ次第長押壱本さけてつ
 りかすかい端ニ水貫入て
 くミ物斗りひめこ・つか
 一 両つま入もやそなへこうりやうたいへいつか有リ
 ひの木／ 一 げんきよあおいひれつけて
 ひの木
 一 脇ノ大間まいら戸壱本ツ、式本有リ尤車戸ニ
 つか／ 一 惣よこはめつか板あつ八分ちかいはき
 ひの木／ 一 箱槐鬼板ひれ有リ
 ひの木 一 から戸壱口四枚にしてさねつりかまちさんきやうめん
 上障子にして定リ
 一 内ちん外ちん敷板ぬくい板釘打

寛文十一亥年八月吉日 大嶋山
 瑠璃寺法印信應代（異筆）

(／印は原文で改行されているものを追い込みした記号)

の柱で18本を数えている。一方、垂木数は前者では地垂木を196本(長さ12尺)、飛檐垂木を208本(長さ12尺)に計算し、後者では地垂木(長さ10尺)、飛檐垂木(長さ6尺程)ともに340本として、大きく異なる。これは、前者では半繁垂木で拾い、後者では繁垂木で拾っていることを示している。⁹⁾

柱上部の部材についてみると、前者では頭貫のみを木寄し、後者では頭貫と平桁(台輪)を木寄している。この点では後者の木寄が現本堂と一致している。しかし、後者の木寄では柱太さはすべて1尺1寸であるが、現本堂の内部柱の太さは前述のように寛文6年の材木検査の結果(「注文之うつし」と一致している。つまり現本堂は、柱太さでは「注文之うつし」と一致するものの、部材の木寄では「大間三間四面ノ堂ノ木寄ノ注文」と一致する。このように、現本堂には双方の文書の内容を混合した結果があらわれている。

また、木寄の内容は本堂全体の部材に及んでおり、棟札には「奉修造」と記されているが、史料や遺構を見る限り寛文12年の工事の内容は修理ではなく再建（新築）であったことがわかる。

(5) 「大嶋山薬師堂作事之注文」と「本堂作始之注文」

寛文11年の「大嶋山薬師堂作事之注文」（以下文書Aと称す）と年号不詳の「本堂作始之注文」（同 文書B）はいずれも本堂の仕様を記したものである（表2、3）。文書Bは一度清書された行間に異筆で細部について追加事項が記されている。

これら2通の注文書(文書A・B)は筆跡や記載の順番は同一ではないが、内容として共通しているのは、「大間九尺脇ノ間七尺三間四面高サ定り次第」,「軒二軒内四方老間づつ屋根裏中九尺四方鏡天井」などで、現本堂の構造形式の内容を示している。仕様で異なっているのは、1つには向拝の木鼻の仕様で、文書Aでは「向拝あり、虹梁木鼻しか蓼股彫り物、三斗、軒垂木二軒、手挟み絵様物」とあり、文書Bでは「向拝虹梁の木鼻象鼻、手挟籠彫り届次第、その木鼻獅子鼻足付きニ」とある点である。もう1つは主屋の軒の形式で、文書Aでは「垂木半しげ物」(半繁垂木)とし、文書Bでは「二軒しげ物」(繁垂木)としている点である。これらの内容が現在の本堂と一致するのは文書Bの仕様である。

つぎに、垂木と側柱上部の仕様に着目し、注文書の内容と前述の寛文3年の木寄とを比較すると、半繁垂木で頭貫だけを用いる文書Aの内容が飯田善太郎の署名のある「御樂師堂木寄」の内容と一致し、繁垂木で頭貫と台輪を用いる文書Bの内容は「大間三間四面ノ堂ノ木寄ノ注文」や現本堂の仕様と一致している。

文書Bで注目されるのは、一度清書された行間に異筆

で追加事項が記され、さらに末尾に「右地わり注文之通りノ本堂之地わりヲ寸かぞへニ被成御見せ可給候」とある点である。これは、文書Bが大工から示された設計仕様を書き写し、さらに追加事項を記入し、再度大工に注文した下書きであることを示しており、また、寺から大工にこの地割注文による縮尺1/10の図面（建地割）の提出を要求した内容となっている。つまり、棟梁がまず様式を簡条書きした建築仕様書を施主に示し、施主がこれに追加事項を記入し、こうしてまとめた内容にしたがって棟梁が図面を作成するという設計段階の進め方を示している。また、上述のように注文書の内容と木寄の内容が一致するということは、棟梁がまず仕様書を作成し、これにしたがって木寄もおこない、これら一対の書類を施主に提出したものと考えられる。

4. 飯田善太郎と彼の意匠の特色について

飯田善太郎は万治年間ころに和泉国堺から駒場村（現阿智村）に移住した大工である¹⁰⁾。

この飯田善太郎は、寛文6年に満光寺本堂（焼失、高遠町）を建てた「大工棟梁、本国泉州堺住人、当国駒場住飯田善太郎重光」（満光寺文書）と同一人物と考えられる。彼の作品としては、立石寺本堂（寛文9年、飯田市）、柏心寺本堂（寛文10年頃、飯田市）¹¹⁾がある。

善太郎が立石寺本堂を造営したことは、棟札に寛文7年2月に細工始をし、同9年8月に入仏供養をしたこと、大工が飯田善太郎と山本金右衛門であったことが記されていることからわかる。この本堂は間口の柱間を7尺・9尺・7尺の三間にとる入母屋造の建築（一間向拝付）で、間口の柱間寸法は瑠璃寺本堂と同一である。軒や向拝の形式をみると、軒は二軒の半繁垂木で、向拝には虹梁形頭貫に鰹のついた木鼻をつけ連三斗を組んでいる（図5）。この仕様は前述の「大嶋山薬師堂作事之注文」にある「半しげ物」、「虹梁木鼻しかみ葎股彫り物」に相当する。また、側まわりの柱上部は頭貫（木鼻は鰹付）を通し、三斗（拳鼻付）を組み、台輪を用いていない。これも「組物三ッ斗桧貫ノ鼻しかみ鼻」と一致している。

立石寺本堂にみられる善太郎の意匠の特色は、半繁垂木で頭貫だけを用いる「大嶋山薬師堂作事之注文」の内容と共通点が多く、また前述のように「大嶋山薬師堂作事之注文」は善太郎の署名のある「御薬師堂木寄」の内容と一致しているから、「大嶋山薬師堂作事之注文」は、寛文3年に善太郎が瑠璃寺に提出した「御薬師堂木寄」と一対の仕様書の内容とみることができる。

つまり、寛文3年に彼が瑠璃寺に提出した「御薬師堂木寄」と一対の仕様書があり、これを寺で寛文11年に書き写したものが「大嶋山薬師堂作事之注文」であると考えられる。おそらく「本堂作始之注文」の参考にするた

めに書き写したのであろう。寛文3年に彼が瑠璃寺に仕様書と木寄を提出したと判断できるので、その時点では瑠璃寺本堂の造営は飯田善太郎が棟梁として着工される手筈であったと考えられる。

寛文3年に瑠璃寺に「御薬師堂木寄」を提出して以後の彼の造営記録をみると、満光寺本堂（同6年完成）は同4年ころには造営に着手していたと考えられ¹²⁾、前述のように瑠璃寺はこの時点では建築用材の大半が未納入の状態であったから、おそらく早く材木の集まった満光寺本堂の建設に彼は着手したものとみられる。満光寺本堂が完成した寛文6年でも瑠璃寺では材木納入は依然半分程度の状況であった。善太郎は翌7年2月に立石寺本堂の造営に着手し、同9年8月に立石寺本堂を完成させ、同10年ころには柏心寺本堂を完成させていることから、立石寺本堂の造営の後半からは柏心寺本堂の造営も重複して着手されていたものと考えられる。

つまり、寛文3年の時点では善太郎は瑠璃寺本堂の造営も可能な状況であったが、その後は彼の動向をみる限り瑠璃寺本堂以外の造営で手一杯となっている。こうした状況の中で寛文8年の「大間三間四面ノ堂ノ木寄ノ注文」が登場したのであろう。つまり、本堂造営棟梁の交替がこの頃にあったと考えられ、また、「大間三間四面ノ堂ノ木寄ノ注文」に記された根拠の明らかでない寛文8年の年紀も妥当な年紀とみなされる。

5. 田辺太右衛門尉為長について

田辺太右衛門の名前は瑠璃寺本堂が今のところ初出で、その後、貞享3年(1686)の吉田神社の棟札¹³⁾、同5年の白山社奥社本殿（飯田市、重要文化財）の修理棟札¹⁴⁾にその名前がみられる。つまり太右衛門は瑠璃寺本堂建立の頃から飯田の大工として頭角をあらわしたことになる。

ところで、瑠璃寺本堂の大瓶束の結綿（図6）は天文18年(1549)ころの建立¹⁵⁾と推定される開善寺山門（飯田市、重要文化財）や承応2年(1653)建立¹⁶⁾の萩山神社諏訪社（高森町）の大瓶束結綿とよく似ている。この大瓶束結綿の類似性と大工の関係をみてみたい。

開善寺山門は慶長5年(1600)以前に開善寺番匠清水筑後（慶長5年没）によって修理されている¹⁷⁾。この時期の清水氏の名前は元和7年(1621)の桐林八幡宮（飯田市）の棟札¹⁸⁾に清水四郎右衛門があり、寛永8年(1631)の開善寺鐘樓の造営記録¹⁹⁾に清水三太夫があり、同13年の上川路八幡宮の造営記録²⁰⁾に清水伝右衛門為有（筑後の子²¹⁾）、同19年の伊豆木八幡宮の木槌銘²²⁾に清水伝一郎とあり、承応2年の萩山神社諏訪社の束墨書²³⁾に清水伝右衛門為定丞とある。つまり清水氏は17世紀前半に開善寺を拠点として周辺の造営に登場する大工である。この清水氏が「為有」、「為定」を名のっており、田辺太

右衛門が「為長」を名のっているので、田辺氏は清水氏の後継者という位置づけが考えられる。また、萩山神社諏訪社の束墨書には清水伝右衛門のほかに市田村の上沼長四郎清綱の名前があり、この上沼長四郎は前述の「御本堂御材木之覚」に請人として連名している「市田村上沼長四郎」と同一人物と考えられる。萩山神社諏訪社と瑠璃寺本堂の双方に上沼長四郎の名前が出てくると瑠璃寺本堂の大瓶束結綿が開善寺山門や萩山神社諏訪社の大瓶束結綿とよく似ていることとは無縁ではなく、技法の類似性は清水・上沼・田辺氏という大工のつながりがあるが生じたと考えられる。また、飯田善太郎が立石寺本堂に足掛け3年を要しているのに、田辺太右衛門が同規模の瑠璃寺本堂を1年余で仕上げているのも、清水・上沼氏による組織力が背景にあると考えられる²⁴⁾。

これから、瑠璃寺本堂の造営は、和泉国堺という技術水準の高い地から飯田に移住した飯田善太郎が当初に設計し、寛文8年頃に開善寺番匠として活動していた清水氏系列の田辺太右衛門に変更されたと考えられる。田辺氏の名前はこの時期の飯田周辺の建築に限られているので、田辺氏もまた飯田善太郎のように畿内から移住してきた大工ではないかと推定される。

6. 瑠璃寺本堂造営ころの建築遺構と技法

下伊那地方の17世紀中期の建築遺構のうち向拝をもつ建築について、向拝の木鼻、組物、中備、主屋との繋ぎ、手挟の有無を比較すると次のようになる。

年代	建物名	木鼻	組物	中備	繋ぎ	手挟
承応2年	萩山神社諏訪社(高綱)	象	連三斗	養股	海老虹梁	無
寛文2年	鳩ヶ嶺八幡宮本殿(細師)	象	連三斗	養股	海老虹梁	無
寛文7年	立石寺本堂(細師)	鰻	連三斗	養股	海老虹梁	無
寛文11年	安布知神社本殿(附附)	象	連三斗	養股	海老虹梁	無
寛文12年	瑠璃寺本堂(高綱)	象・野	三斗2股	養股	海老虹梁	有
延宝6年	桐林八幡社本殿(細師)	象	連三斗	養股	海老虹梁	無
延宝7年	伊豆木八幡宮本殿(細師)	拳	三斗	養股	無	無

これからみると向拝の木鼻に象と唐獅子を付け、手挟(籠彫)をつけた建築はこの時期の下伊那地方では瑠璃寺本堂だけである。県内のこの時期の建築で象と唐獅子など丸彫の木鼻を向拝柱上部の前方と頭貫方向の2面に付け、籠彫の手挟をつけている建築は、

万治3年 真田信之霊屋(長野市、重要文化財)
寛文5年 真楽寺観音堂(御代田町)

など数少ない。つまり、田辺氏の仕様は信濃では後の18世紀前半から用いられるようになる様式を先取りしていることになる。ただし籠彫の手挟、養股は、「たばさみかごほり届次第」、「四方ノ大間にかいるまたこはいとも五ッかごほり届次第」(「本堂作始之注文」)とあり、これは輸送可能な手挟や養股などの籠彫を寺が外注したことを示していると考えられる。江戸中期に絵様や彫刻を施した部材を遠方まで輸送した実態については、永井規男氏の

「近世大坂大工宮屋とその営業形態」²⁵⁾で明らかにされており、また、当初に瑠璃寺本堂の設計をした善太郎の生国和泉国堺には寛文期以前から彫物師がいたことが、大河直躬氏の「幕府の建築と作事方」²⁶⁾や谷直樹氏の「寛永期における中井家配下の大工構成」²⁷⁾で明らかにされており、おそらく寺も田辺氏を通じてこうした彫物師に依頼したのであろう。とすれば信濃のこの時期の建築として先進的な要素があることも理解できる。

7. まとめ

造営史料の検討から、瑠璃寺本堂の建設過程は次のように整理されよう。

万治3年に瑠璃寺48世信応によって発願された本堂の再建は、寛文3年2月に飯田善太郎の設計、木寄によって具体的な内容が固められたと考えられ、翌3月には材木納入の請負契約もおこなわれた。しかし、この年の6月に信応が遷化し、これを継承した49世亮応の時代の初期には材木の納入は契約どおりに履行されておらず、寛文6年になっても全体の半数が納入されただけという状況で、寺では奉行所にも訴え出た。その後、寛文8年頃に飯田善太郎が棟梁を降り、当時飯田で勢力をもっていた清水氏系列に属していたとみられる田辺太右衛門が棟梁となった。彼は自分の仕様書、木寄を提出したが、既に集まっている部材については寸法等を変更した。そして本堂再建は寛文11年10月によりやく着工にこぎつけ、翌12年11月に完成したのである。

工事の進め方については、まず、施主が棟梁を選択し、指名された棟梁は建築の内容を詳細に箇条書きした仕様書の作成と木寄をおこない、この木寄をもとに施主が材木を発注するという形態であったことが明らかとなった。また、瑠璃寺の場合は、この後に棟梁に対して建地割を要求している。これは設計図面を施主に提示することがある程度普及していたことを示していると考えられる。

このように造営に着手する以前の状況については、史料や周辺の資料から明らかとなったが、着工から竣工までの状況については史料を欠き、大工手間が請負²⁸⁾であったのか直用であったのかという点などは明らかではない。瑠璃寺本堂の場合、大工手間が請負契約であれば、仕様書の末尾に「御本堂御材木之覚」と同様に、請負金額、支払い方法、工期などが記されたであろうし、また、18世紀後期のように立面図や木寄注文を最初に提示し、その後に仕様・請負金額・工期などを列記した請負証文が交されるという手順²⁹⁾であれば、当初に棟梁であった飯田善太郎が途中で田辺太右衛門に交替するというようなことは通常では起こりがたいことである。しかし、前述のように棟梁の交替は現実におこなわれ、この交替の時期に善太郎は立石寺本堂を造営しており、彼が契約

に拘束されて活動していたとは考えられない。つまり、瑠璃寺本堂の造営では大工職人については寺が直用して日当を支払う方法であったと推定され、したがって着工以前に棟梁の交替があっても、大工に契約不履行という不名誉な結果が生じることはなかったものと考ええる。

次に、瑠璃寺本堂の様式や技法についてみると、来迎柱が残っている点では室町時代の伝統が残されているが、向拝木鼻や手挟・蓼股などの籠彫は信濃では18世紀前半から用いられるようになる技法を先取りしている。つまり、伝統的な部分と当時の信濃の建築としては最先端に属する技法が混在している点に瑠璃寺本堂の特色があると考えられる。ただ、こうした籠彫の手挟・蓼股は外注によって賄われたことが判明したので、地方における建築様式の時代的な変遷は大工の移動や部材の外注の有無を考慮することが必要であろう。

瑠璃寺本堂は、単に江戸時代中期初頭の建築として貴重だけでなく、設計仕様書や木材数量計算書という史料が残され、遺構と史料が比較検討できる点で貴重である。さらに、その史料は寛文年間における設計の進め方、契約の仕方、あるいは飯田周辺の大工勢力の背景を含んだ内容をもっており、当時の信州南部の造営事情を知る上でも貴重であることがわかった。

注

- 1) 慶長13年(1608)の「信州伊那郡大嶋山瑠璃教寺之縁起」によれば、瑠璃寺は天永3年(1112)に比叡山竹林院の観音僧都によって大島川上流の「堂所」地籍に創建され、境内は最終的には寛永元年(1624)に現在地に移っている。本尊の木造薬師如来及両脇侍像(平安時代末期)は重要文化財。万治3年(1660)の「信州大嶋山本堂勧進帳」には、「特ニ請蒙十方檀那助成再興一字伽藍勧進之状」として、寺の由来が薬師瑠璃光如来にあること、さらにこの如来の功德を記しており、瑠璃寺の本堂は薬師如来をまつる薬師堂であることを示している。
- 2) 調査結果は、「長野県の近世社寺建築」(長野県教育委員会、昭和57年)にまとめられている。
- 3) 『近世社寺建築の研究第1号-第1回近世社寺建築研究集会記録』(奈良国立文化財研究所、昭和63年)による。
- 4) 平成4年に飯田市美術館が実施した。
- 5) 室町時代のもものでは享禄4年(1531)の善光寺造営図(建地割、重要文化財)がある。江戸中期のものでは小泉家資料(地割・木寄、寛文~元禄期、『佐久市志』美術建築編、1995)、宝永4年(1707)の善光寺本堂(国宝)造営資料(建地割、『長野県史』美術建築資料編(2)建築、1990)、宝永8年の若一王子神社三重塔造営資料(建地割・木割、同)などがある。
- 6) 元文4年「本堂修復入用覚」(瑠璃寺文書)。
- 7) 納品の数を検査するのに「正」(5画)の筆順にしたがって5本までを記すのではなく、「日」の文字を用い、一・二・三・ヨ・日としている。
- 8) 鉛筆書きされたもので、包み紙などに記されていた年号を近代以降の史料整理のときに記したものと推定される。また、「寛文十一亥年ノ前後、本堂建立之□木取り□作事注文書、七通有之□通置物也、法□、寛政六年□月晦日」と記された虫食い状態の包み紙もあり、近世にも一度造営文書の整理がおこなわれている。
- 9) 196・208本は、木寄に「但シ小数百九十六本二成ル、同ゴはいたる木共ニ」と記された数字である。1尺角を12本割とすると垂木は削り代を考慮しない場合、幅2.5寸、背約3.3寸となる。7尺・9尺・7尺の柱間をこの垂木で、半繁垂木(1枝7.5寸)に枝割りすると、10枝・12枝・10枝または9枝・12枝・9枝に調整される。これに柱筋外側の配付垂木を6枝(計17枝)とり、向拝

に打越垂木を用い、向拝の蟬羽を4枝とすると、 $(6+10+12+10+6) \times 4 + 12 \times 4 \times 2 = 196$ となる。これに論治垂木を1隅3本宛てると $196 + 3 \times 4 = 208$ の計算となる。木寄では、地垂木1尺角12本割を16本(長さ12尺)としてあり、計算上は、 $12 \times 16 = 192$ となる。必要な垂木196本のうち、配付垂木は長さが12尺はいらないので、小さめに本数を拾い上げている。

一方、寛文8年の木寄では、垂木は5寸×1尺の平角材を10本割としており、この垂木寸法は2.5寸×2寸となり、本繁垂木(木間返し)の1枝は4寸となる。上述の柱間では、 $(10+17+22+17+10) \times 4 + 22 \times 6 \times 2 = 338$ (約340)の積算と考えられる。

- 10) 『阿智村誌』下巻(同誌刊行委員会、昭和59年)、751~752頁。同誌には飯田善太郎について、浄土宗伊那谷寺院の触頭であった浄久寺に万治4年に名号碑を奉納したこと、三門の閻魔座像の銘文(寛文3年)に「(前略) 愛予生国泉州堺住居謹以三界六道有為転変世界四相遷流致也、(中略) 願主 信州伊那郡伊柄庄駒場住居 藤原飯田善太郎重直、同内方(以下略)」とあること、また、「中関村御年貢帳」(寛文12年)に駒場村からの入作として「大工善太郎、8俵1斗5升5合5勺2才」とあることが記されている。また、現段階では、本稿に記した以外は飯田氏に関する資料はなく、没年等も不明である。
- 11) 立石寺本堂(観音堂)、柏心寺本堂は、「長野県の近世社寺建築-第二次調査報告書」(注22)に収録されている。柏心寺本堂が飯田善太郎の作品と直接記された史料はないが、柏心寺本堂の外陣にみられる海老虹梁・大瓶束・肘木(和様曲線をもつ)などの形は立石寺本堂の形式と同一で、善太郎の手によるものと判断した。彼が仏像を奉納した浄久寺、彼が再建した満光寺、そして筆者が彼の造営と判断した柏心寺はいずれも浄土宗の寺院という点で共通している。なお、柏心寺の建築年代は、内陣の華鬘銘「寛文十庚戌年」から判断した。
- 12) 立石寺本堂の造営が寛文7年2月から同9年8月まで足掛け3年かかっていることから判断した。
- 13) 『高森町史』下巻(高森町史刊行会、昭和50年)、1107頁。
- 14) 『国宝白山社奥社本殿修理工事報告書』(同修理事務所、昭和15年)所収。「太右衛門」とあり、田辺氏と推定した。
- 15) 『長野県史』美術建築資料編(2)建築(社)長野県史刊行会、1990)。開善寺は臨済宗の寺院。
- 16) 前掲注2、注13。
- 17) 『重要文化財開善寺山門修理工事報告書』(同修理委員会編、昭和36年)。墨書および過去帳による。
- 18) 『竜丘村誌』(竜丘村誌編集委員会、昭和43年)、677頁。
- 19) 『下伊那史』第5巻(下伊那教育会、昭和42年)、610頁。
- 20) 『竜丘村誌』(前掲注18)、672頁。
- 21) 過去帳による。前掲注17所収。
- 22) 『長野県の近世社寺建築-第二次調査報告書』(長野県教育委員会、平成3年)所収。
- 23) 前掲注2、注13。
- 24) 現段階では、田辺氏と清水氏がチームを組んで造営した資料や、清水氏・上沼氏が瑠璃寺本堂の造営チームに加わっていたことを示す資料は見出されていない。ここでは、古い伝統的な様式が継承されている根拠の可能性を提示した。
- 25) 永井規男氏：「近世大坂大工宮屋とその営業形態」、日本建築学会論文報告集第390号、1988、108~116頁。
- 26) 大河直躬：「幕府の建築と作事方」(『世界建築全集3』日本Ⅲ近世、平凡社、1959、所収)。慶長11年(1606)の香取神宮造営資料に、彫物名人で堺出身の可兵衛のことが記されている。
- 27) 谷直樹：「寛永期における中井家配下の大工構成」、日本建築学会論文報告集第415号、1990、101~109頁。和泉国堺の大工として「和泉彫物与一郎」が記されている。
- 28) 中世の請負の発生については、大河直躬氏の著書『番匠』(法政大学出版局、1971、169~174頁)で考察されており、設計図についても同書(212~217頁)で考察されている。大河氏は「中世後期に建築工事のなかで請負行為が芽ばえていたことは認められるが、それは単純な内容の工事が多く、ひろく一般の工事にひろがるには至らなかった」とする。また、永井規男氏は、「歴史的なかの建築生産システム」(『新建築学大系』44巻、彰国社、1982)の中で、手間請負は中世末期の段階でも、「工事規模が小さいものに限られていた」(79頁)としている。
- 29) 拙稿「立川流の建築-白髭神社本殿」(日本建築学会大会学術講演集、1984、2667~2668頁)、「立川流の建築-矢彦神社拝殿・廻廊」(同、1986、F 633~634頁)参照。

(1995年1月10日原稿受理、1995年4月24日採用決定)